

ない現代の発展に寄与しているという視座から、かつて遊牧によってユーラシアを生き抜き、歴史の大きな敷居をいくつも越えるテュルク民族の多彩な姿が描き出され読ませる。

4 松枝到『イメージの産出——文化と歴史の編みもの』せりか書房

脱領域の知性がイメージの誘いのまま果てなく自在に吐き出す言語の糸が、読み終えるころ不思議な知のパスサージュの存在を気づかせる。アビ・ヴァルブルグの知的遺産を受け継ぎ、その視覚のアジアにおける展開を試みる著者の論集。

5 ヴァルター・ベンヤミン／グレーテル・アドルノ『往復書簡 1930-1940』伊藤白・鈴木直・三島憲一訳、みすず書房

この書簡集は日付と註釈なくしては読めないし、内容の迫力がまるつきり異なっている。書簡集のすべての文字面が意味を発しているのである。二人の愛の機微にもまして知と精神と魂の共振に時代の影が映り心揺さぶられる。

辻山良雄

(Title店主)

1 國分功一郎『中動態の世界』医学書院

二〇一七年の人文書の問題はこの本に尽きるのではないか。長い時間をかけ、思考を組み立てていった労作。能動態でも受動態でも

なく、言語の古層に眠っていた「中動態」を掘り起こした著者は、そこに人が人間らしく生きるヒントを見いだす。この言葉、概念を知るだけで、身近にある「中動態な物事」を探してしまおうようになった。

2 レベッカ・ソルニット『ウォークス——歩くことの精神史』東辻賢治郎訳、左右社

ルソーの例を出すまでもなく、人間は歩いているときに何かを思いつく。道をたどり、坂をのぼり、景色がながれ、その中で思考が立ち上がる。古今の「歩く」をキーワードにして、哲学や社会学、芸術、サイエンスなど様々なトピックが次々と開陳される。本文のスピード感も「歩く」速さに近く、ゆっくりと楽しめる一冊。

3 松村圭一郎『うしろめたさの人類学』ミシマ社

エチオピアから帰ってきた人類学者の見た日本の社会は、「おかしな」人がいない社会だった。それは一見スムーズだが、自分とは「違う」人を受け容れる活力に欠け、豊かさが抜け落ちる。人類学という学問の面白さと、社会批評の鋭さ、人間を深く捉えた倫理観が交じり合い、他に見たことがない言葉が生まれた。

4 チャールズ・フォスター『動物になって生きてみた』西田美緒子訳、河出書房新社

Titleの店頭からもよく売れていた本だが、

誰もがうつつすらと思っている感情に問いかけるのだらう。著者は「人間とは何か」「自分は誰か」という根源的な問いを考え続けているうちに、自ら野生動物になり切り、そこから世界を見るということに思い至った。その思いは真剣であり、笑ってしまっても、その後胸を打つ。

5 若菜晃子『街と山のあいだ』アノニマ・スタジオ

人が暮らす街と、そこから遙か遠くに見える山。そこを行き来するうちに著者は、街にいながら山を感じられるようになった。アルプスの高峰、なだらかな低山、記憶に残る山をしみじみとつづったこの本は、読む人の憧れを誘う。自らのうちに自然がある人は、それだけで豊かに生きられる。

斎藤成也

(人類学)

1 増田義郎『インカ帝国探検記——ある文化の滅亡の歴史』中公文庫新装版、二〇一七年

原著は著者が三三歳だった一九六一年の刊行。二〇一六年に逝去した著者は、ラテンアメリカ研究の第一線にながく君臨した。ピサロが綿密に計画し、アズテカ帝国を征服したコルテスからも秘策をさすけられたらしいことも記されている。そして本書は「……かつ

ての偉大な帝国が、アンドレスの世界にふたたびよみがえってこない、だれが言いえることができるだろうか」という、不思議な情熱を呼ぶ言葉で終わっている。解説は弟子のひとり、網野徹哉。

2 五十嵐太郎『日本の建築家はなぜ世界で愛されるのか』PHP新書、二〇一七年

『日本建築入門』の著者とその仲間による、世界で活躍する日本の建築家の俯瞰的紹介。コンサイスだが、丹下健三から田根剛までを網羅しており、多数の建築家が登場して、内容が濃い。それにしても、世界中における日本の建築家の活躍には目をみはる。本書を旅行に持参して、海外での日本建築を楽しみたい。

3 後藤明『イスラーム世界史』角川ソフィア文庫、二〇一七年

メソポタミア文明から現代まで、広大なイスラーム世界の歴史を適切に概観した好著。インドに滞在した一週間のあいだ、ずっと読み進めた。ヒンドゥーとイスラームが混在するインドでも、イスラームの存在は感じられた。ISを的確に理解するためにも、われわれはもっとイスラームの全貌を知る必要があるだろう。

4 川島博之『戸籍アバウト』イト国家・中国の崩壊』講談社＋α新書、二〇一七年

工学博士である農業経済学の専門家が、農民と都市民の戸籍格差をキースとして、近くあ

の国におとずれる経済的崩壊を推測している。すでに多くの評論家が類似の予言をしているが、本書は歴史を踏まえて多角的に事象をとらえており、すぐれた考察が随所にある。日本も大きな影響をうける近未来の状況に、一般庶民であるわれわれは、どう備えるべきだろうか？

5 かわぐちかいじ『空母いぶき』一〇八巻、小学館、二〇一四〜二〇一七年

無人の尖閣列島だけでなく、日本人が居住する沖縄の島々も急襲・占領されるというシナリオが衝撃的な、『ビッグコミック』で現在連載中のコミック、『沈黙の艦隊』の作者が潜水艦から空母におもな舞台を移し、しかもより現実世界の状況に近づいている。中華人民共和国の軍事関係者はこの書をどうとらえているのだろうか？

## 西谷 修

(思想史)

1 宮城谷昌光『王家の風日』(文春文庫、一九九四年)、『天空の舟』小説・伊尹伝』(文春文庫、一九九三年)

ポール・ヴィリリオの、西洋近代国家の原型は植民国家であるとの指摘(『民衆防衛とエコロジー闘争』)に納得し、王家・法と国家・政教分離・国民国家とは違う権力・権威と支配・統治圏の形成とはどんなものかと考

えているときに、出合ったのが宮城谷の一連の小説。宮城谷は漢字に取り憑かれ、漢字が権力の集約点で使われるようになる商(殷)王朝に引き寄せられ、商最後の繁栄と没落を一身に体現する帝紂の時代を、宰相箕子を主人公に描き出す(『王家の風日』)。「史記」をそれ以前の書物・断簡と照らして批判的に読み解き、さらに金文・甲骨文の研究を折り込んで、商末期における王族や諸侯・庶民の関係を具体的な人間関係の次元で描き出してゆく。強靱な想像力が小説というものの可能性を古代に広げてゆく。『天空の舟』はまだ漢字の使われていない時代、しかし孔子や孟子に宰相の範と謳われた商生成期の伊尹を造形したもの。甲骨文字さえない時代、それでも人びとは当時の統治関係のなかで個々の思いをもって生きていた。考古学や歴史学が再現できない人びとの生きる次元を、解釈の試みや典拠批判を示しつつ語り出す。宮城谷はこれ以降、秦・漢を経て三国に至るまでの中国古代をまさに黄河の流れをなぞるように描き続けている。国家や法、宗教について根本から考えたいと思っている者にとって沃野を開くような仕事である。

2 渡辺公三『司法的同一性の誕生』——市民社会における個体識別と登録』言叢社、二〇〇三年

師走のある日、訃報が届いた。レヴィニス